

臨床検査技師業務改善と働き方改革の取り組みについて

◎久野 敬子¹⁾、岩田 幸蔵¹⁾、水野 義樹¹⁾、稲生 千絵美¹⁾、廣田 優美¹⁾
社会医療法人 宏潤会 大同病院¹⁾

【はじめに】当院は2006年に病院の外来機能を分離し、別施設のだいどうクリニックへ移行した。これに伴い、検査室では日中の検査拠点をクリニックに移設し、2004年から技師が行っていた外来採血も引き続き技師がクリニックで行うこととなり、採血室では全自動採血管準備装置BC・ROBOを2006年に導入し対応した。病院検査室は主に、病棟、救急外来、手術室にて発生した検査を対象とし、朝から大量の検体が検査室に運ばれてくるが、検査室を病院とクリニックに分割したため人員に余裕はなく、病棟採血の結果が遅れることもしばしばあった。その後更に患者数、検体数が増え、2019年11月に採血管準備装置の機種変更をきっかけに、臨床検査技師の業務改善の取り組みによる診療および職員への影響について報告する。

【主な取り組み】①採血管準備装置の更新により、採血台3台から6台に増設。採血技師も3名から6名に増員②早出業務を廃止し検体検査所属技師の勤務時間を7:30-16:00に変更③当直業務(17:00-翌日14:00)を夜勤(16:00-翌日9:00)へ変更④翌日の病棟患者採血管準備締切り

を16:00から15:00へ変更

【結果】検体検査所属技師の勤務時間を変更し、早朝業務対応人数を増員することにより、クリニック患者の採血待ち時間の短縮および診察開始前の測定と結果報告が可能となり、結果の問い合わせが減少した。また、夜勤への変更と共に朝の病棟採血を順次測定する運用に変更したことにより、病棟採血結果の報告所要時間が短縮され、早期治療開始への貢献が可能となった。

【考察】勤務時間を早めることに対して、当初は技師の賛同を得ることが難しかったが、実際に業務改善をすることにより、患者サービス向上に貢献でき、更に残業の削減など検査技師の働き方改革にも結びついた。しかし、稀に特殊検査の問い合わせや機器のメンテナンスのため16時に終業できない場合もあり、今後の課題となっている。これからも患者のために何ができるのかを考えながら、新たな業務改善に取り組み、前向きな姿勢を病院へアピールしていきたい。

連絡先：大同病院 052-611-6261（内線3672）